

ありがとうと言える子どもを育てる

「ありがとう」

さまざまないのちのつながりに気づき、おかげさまのこころを育む。

この原稿がお手元に届くころ、新型コロナウイルス感染症はどのような状況になっているでしょうか。3月、私たちの幼稚園では卒園式を大幅に縮小し、一クラスずつ執り行いました。4月の入園式は残念ながら開催することができません。臨時休園となりました。感染に怯え、できるはずのことができないものか、かきさの中で日々を過ごしながら、何事もあたりまえではないのだと気づかされます。友だちに会える、お店が開いている、仕事に出かけられる、といった普通の日常がこんな形で見舞われることが多くなってきました。東日本大震災以来、私たちは予期せぬ大災害に見舞われることが多くなってきました。元気でいること、あたりまえのような日常の有り難さをかみしめます。

延徳4（1492）年、今から500年以上前の日本では、同じように深刻な疫病が流行していました。コロナプスがアメリカ大陸を発見したこの年、蓮如上人はこんな御文章を書き残していらつしやいます。

当時このころ、ことのほかに疫病（まは）としてひと死す。これさらに疫病によりてはじめて死するにはあらず。生れはじめてよりして定まれる定業なり。そのみふかくおどろくまじきことなり。しかれども、今の時分にあたりて死するときは、さもありぬべきやうにみなひとおもへり。（多くの人が今流行している疫病で亡くなっている。疫病があるから死ぬわけではない。生まれてきたからには、必ず死ぬべきさだめである。おどろくことではない。けれど、今死んでしまうと、疫病のために死ぬのだと皆が考えるようだ。）

まるで同時代に生きていくか錯覚するほど、蓮如上人の言葉は鋭く現実を示しておられます。人間の歴史は、こうした疫病の流行や異常気象に苛まれながら、なんとか生き延びてきた歩みともいえるでしょう。医療技術の進歩も、天気予報の進化も、私たちの「未知のものへの恐れ」から生み出され、発展を遂げました。けれど、疫病の有無にかかわらず、生きていくものはいつか必ず死を迎えます。

本当にこわいのは死や細菌といった「未知のもの」ではなく、私自身の中にひそむ差別や偏見である。親鸞聖人のみ教えによって、私たちはそう気づかせていただきます。恐れのために盲目になり、人と和することを忘れる。そんな愚かな人間の姿こそが、阿弥陀如来の救いのお目当てなのです。

先日、あるお母さまからこんなお話を聞きました。妊娠8か月を迎えて健診に行った時のこと、4歳の兄が胎児の心臓の音に驚いて「それ、なんの音？」とお医者さまに尋ねたのだそうです。すると先生は「赤ちゃんの心臓の音だよ」と言って、お兄ちゃんの胸に聴診器を当てて、彼の鼓動を聞かせてくれました。「同じ音がする！」と驚いて、以来、お兄ちゃん

は心臓にとっても興味をもち、お友だちや担任の胸にも耳を当てるようになったとか。生きていくということ、つながり合っているということ。そう感じられる体験は多くありません。新型コロナウイルス感染症の流行は、地球上に生きる多くの人々とのいのちのつながりを、新たな視点から証明しているのかもしれない。

まことの保育の願い

教育原理委員会 宮武紗和子